



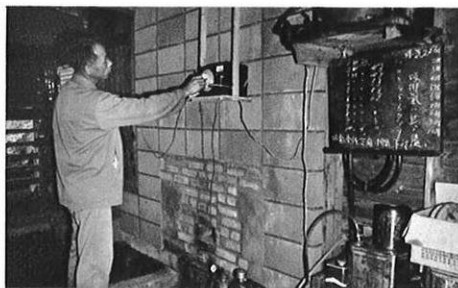
上・年間雨量2000ミリである小国地方はしいたけ栽培には適地。



下・採取して乾燥仕上げまで15~6時間、乾燥には経験と高度の技術が要求される



上・ほた場の光量は1200 1500ルクスが最適  
原木に接種してから採取まで1年半 2年かかる



上・生しいたけの乾燥—温度を決めれば自動的に調節される。



左・出荷量も年々ふえてきている。



阿蘇郡小国町にて

ほのかにただよ味と香り、「しいたけ」には、まさに日本人の味覚があり、ふるさとがある。本県のしいたけの生産は、全国でも、質量ともに優位を占めているが、なかでも小国地方は、有名な産地である。生産者も三〇〇戸を越え、四十年以上に林業のしいたけの部として、構造改善事業が実施されてからは、急速に発展した。

最も気象条件に影響されるしいたけであるが、その生産を安定させるため、悪条件を克服する努力が続けられた。今では、防風壁、掘場の灌水、浸水打木、搦むし、ビニールハウスの利用など、いわゆる人工栽培がさかんに行なわれている。一番むづかしいといわれる乾燥技術も、わずか〇・五度の差を調節する自動温度調節機や、乾燥時間の能率を高める回転乾燥機を導入するなど、経営の近代化が進められている。

日本だけの特産品であるしいたけは、最近、東南アジア、アメリカなど、海外輸出も急速に伸び、品不足の状態である。今や貴重品とまでいわれる原木のクヌギが不足しているとはいえ、発展の門戸は大きく開かれているといえよう。

よこがお

**阿蘇山東部の拡大造林**

阿蘇地域では、このところ造林の拡大によって遊休地の利用度を高め、所得の増大をはかる、いわゆる拡大造林が盛んになってきた。

高森町の草ヶ部、野尻地区、それに蘇陽町を中心とした阿蘇山東部には、約二万五、〇〇〇畝の原野があり、この内、遊休原野は五、〇〇〇畝に及ぶとみられている。

既に、三十六年度から四十年にかけて、高森町で一、六八〇畝、蘇陽町で四七二畝の造林が行なわれ、四十一年度は、山東部一帯で七、七〇〇畝の造林が計画されている。

ところで、この造林を行なう人は大部分が農業や畜産との複合経営農家であることから、当然その関連性の上に立った経営が、最大の課題ともなっている。その点、高森町草ヶ部地区の峰留部や、河原地区などで行なわれている、造林と畜産を結びつけた、「あか牛」の林間放牧は、今後の一つの方向を示唆しているといえるようである。

三十八年頃から試みられているこの林間放牧は下刈りの労力不足の解消を図る農家の知恵として生れたもの。まだ日も浅いため、何年生の山に牛を入れたらよいか、木と木の間隔をどの程度に植えるか、木の損傷度など、今後の研究に待つところは多いが、草やツタを牛が喰べるため下刈りの労力が不要なこと、風雨や日照りの時は、樹木が陰をつくり、牛の健康はもちろん、受胎率や増殖率がよいことなどは確かである。

また、四十年十一月に、高森町に素材共販所が生れ、共販体制が整ったことも、山林所有者には明るいニュースである。ここでは一本の木でも入札される。買ったたかれる心配もない。価格の安定は拡大造林の意欲にもつながっている。県では「エド杉」「アヤ杉」「南郷杉」などの増産をすすめる一方、クヌギ造林による稚樹栽培などの林産物で短期所得の増収を図るなどで、阿蘇山東部の造林は活気をみせはじめている。今後は造林のあい路になっていく入会林野の近代化などが、拡大造林を進めていく上での一つの鍵といえよう。

荷など未解決のため、幾多の失敗や苦難を得て、漸く産地化への兆をみせてきたのは昭和三十年を過ぎてからである。波野村のごぼう、かんらん、はくさい。高森町のかんらん、はくさい、にんじん、蘇陽町のかんらん、はくさいなど一応の産地としての発展をみた。また高森町における、「みのおせ大根」の集団契約栽培、波野村の種馬鈴しよ採種事業も軌道に乗ってきている。昭和三十八年頃から、加工用とまとの契約栽培に初まる生果とまとの栽培も変遷はあったが高森町、阿蘇町に産地が固定してきている。昭和三十五年には、高森町、蘇陽町が

県のそ菜特産地として指定を受け、産地体制の確立と共同販売の促進をはかるための助成措置など講じてきた高森町などにおいては、出荷体制も農協一本となって系統共販によって有利販売の体制をとるに至っているが、他の産地についてはなお任意組合などの出荷が行われているので、販売数量に対する共販量は三六%に過ぎない。

(3) 主産地の形成について

九州は、夏季は高温のためそ菜の端境となるが、この時期の供給産地として、高冷地、特にあそ高冷地とか、九重高冷地がその主産地として今後発展するもの

と思われる。しかし、例をかんらんにとつても、九重産地と阿蘇産地の北九州地域に対する市場供給量を対比してみると市場距離などの問題はあっても市場消費供給の占有率の低いことは産地としてのまことに問題がある。今後産地間の競争に耐えていくには、阿蘇産地として、量的にも質的にも他産地を凌ぐだけの生産をもち、また、出荷についても必要量を継続的に供給していきける産地としての形成を急がねばならない。

**高冷地そ菜振興上の問題点**

(1) 生産立地の問題点

阿蘇山東部一帯の耕地は、東外輪山の波状傾斜のくぼ地に点在しているため、農道が未整備のままとなつて耕地の集団化も大きくは期待できない。しかも土壌は火山灰であるから、有機質を多く施さないと収量もあがらない。

(2) 生産上の問題点

最近、農家労働力の減少は本地方でも例外ではない。特に若年層の移出は、そ菜のように高度の栽培技術や多くの労力を要するものでは、特に大きい痛手となっている。労力不足は特に一戸当りの経営規模の拡大によって生産性の向上と安定をはかっていくための隘路となつてい

今後自然立地を活かした栽培方式を確立していくには、収量の引上げと省力化をねらった耕種法を確立すると共に、徹

(1) 産地の集団化をはかる

今後は協業化機械化促進のための基盤整備を実施しなくては他産地との競争に立ちおくれることになる。

(2) 経営規模の拡大をはかる

そ菜の団地化をはかると共にそ菜面積の規模を拡大して、大型機械などの導入による省力化をはかる。

(3) 収益性の向上をはかる

生産費の低減、生産技術の向上、出荷経費の節減など、収益性の検討とその対策を講ずる。

(4) 生産者組織の強化をはかる

農協を中心とした生産者組織、特に生産活動の母体としてのグループなり、集団活動の生産体を育成する。

(5) 共販組織を強力に推進する

生産者の完全農協系統による完全共販の体制を確立して市場信用を得る。

底した防除体制をとる必要がある。

(3) 出荷販売の問題点

道路の整備がおくれ、対市場距離など問題はあがるが、一部産地では商人との結びつきが強い。また任意組合と市場との関係もあって、出荷についても問題がある。その原因は農協が弱体のため生産出荷に意欲的な取扱の体制をとることができなかつたことにもよる。従つて今後は生産出荷の一元化、計画化を実施しなれば産地としての基盤確立はない。

**今後の対策**